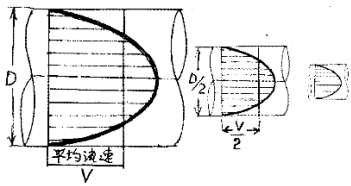
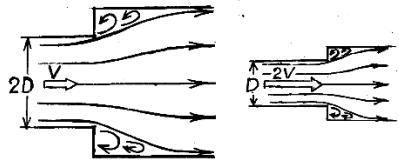


「『配管設計』実用ノート」(978-4-526-07682-4)  
【正誤表】

本書内に下記誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

頁、行、図番	誤	正
25 頁 図 2.3.1	 <p>流れの相似(動粘性係数は同一)</p>	 <p>流れの相似(動粘性係数は同一)</p>
31 頁の左列 下から 17 行目	…輸送能力…	…損失水頭…
31 頁の左列 下から 16 行目	しかし、内径 5 m の管の断面積 $S$ は $19.6 \text{ m}^2$ で、開水路の流路の断面積 $12.5 \text{ m}^2$ より、57% も大きい。これは、開水路に損失の基となる壁が部分的にないことが利いている。	左の文を削除する。
31 頁の左列 下から 2 行目	…に示す。	…に示す(流速、流量の変化も同じ)。
31 頁の右列 最終行	…1.22 倍になる。	…1.22 倍になる。また、流量最大となるのは、 $\theta$ が $308^\circ$ のときである。
31 頁 図 2.6.5 のキャプション	…輸送能力	…流体平均深さ
67 頁 図 4.4.4	サポート高さをポンプ中心に合わせる	サポート高さをポンプ中心に合わせる(ポンプがポンプ中心 EL で固定の場合)
84 頁の左列 下から 11 行目	…、耐圧上必要な厚さ	…、耐圧上必要な厚さ(ただし、付加厚さ $A$ を加えない)
92 頁の附表 3 重さまたは重量	= kgf	= 0.102kgf
121 頁の附表 5 リングの断面 係数 $Z$	$\frac{\pi (d_2^4 - d_1^4)}{32 d^2}$	$\frac{\pi (d_2^4 - d_1^4)}{32 d_2}$
141 頁の左列 18 行目の式 (9.1.4)	$2\text{Fe}(\text{OH})_2 + \frac{1}{2}\text{O}_2 = \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$	$\text{Fe}(\text{OH})_2 + \frac{1}{2}\text{H}_2\text{O} + \frac{1}{4}\text{O}_2$ = $\text{Fe}(\text{OH})_3$

